

まえがき

本書は、拙著『マラルメの詩学——抒情と抽象をめぐる近現代の芸術家たち——』（勁草書房、一九九九）と『ことばとイメージの交歓——フランスと日本の诗情——』（人文書院、二〇〇五）を引き継ぐものである。一貫した著者の関心により、一九世紀象徴派詩人ステファヌ・マラルメの詩と思索に導かれ、芸術諸ジャンルの相互関連と東西文化の相関性の探究へと視野を広げながら試みた書物である。

大学の学部生時代から学んだマラルメの文芸思想において、いわゆる文学のみならず美術や音楽への深い洞察、それらと文学との本質的繋がりに対する探究を見出した。それは、文学を言語による芸術と捉え、いわゆる美術を視覚芸術・空間芸術、音楽を聴覚芸術・時間芸術と考えて統合的に位置づけた芸術諸ジャンルに対して、その相互の関連性を考察する意識に基づくものであった。さらに、そうした芸術諸ジャンルにおける思索や実践が、それらを生んだ文化に深く根差していること、そしてとりわけ創造の核心に「無」「空白」の認識が据えられていること、そのうちに創造主体・人間・自然への省察が認められること、そこに東洋の文化、とりわけ日本の文化への探索が見られることに惹きつけられた。

こうしたマラルメの認識の広遠さを前にして、自国の文化・芸術に対する自身の見識のなさに反省するところが多かった。それは、パリ留学によって日々痛感するものでもあった。しかし、日本の大学で、日本文学ではなく外国文学を専攻し、否応なく自国から他の広い世界に投げ出され、それによって翻って自らの拠って立つ足元を振り返る機会を得たことにむしろ幸運を感じたものである。以来、こうした事柄への関心から、手探りに考察

してきたこと、それらの真価を求めてきた過程が、著者の学びであり、常なる迷いであり、しかしながら何より、多様な自省をともなった喜びであった。

このたび、そのような過程において、名前を聞き知るばかりで遠く無縁のものと思っていたアーネスト・フェノロサ、日本近代の幕開けである明治期において日本の伝統美術・伝統文化の発掘者そして世界へ向けてのその紹介者として名を馳せた。お雇い外国人フェノロサに、新たに自らの関わりとして出会った。その繋がりにおいて関係した実に多岐にわたる人々、芸術諸ジャンルの多彩な創造と交流、文化と歴史の相関について、学びを進めそれをまとめたのが本書である。

個々にあまりに大きい領域にまたがるものを研究対象にすることとなり、多くの関係学会で研究状況を探りつつ学んだが、それは断片的な一貫性ともいえないべき一筋の道を探し求めるにはかならない学びであり、その提示となった。このようにしてできあがった本書は、マラルメの射出す光の追求、そしてフェノロサの文学的価値の探求として、近代から現代において両者の間に連続と継起し浮かび上がったまさに多様な芸術家、その思索と表現の検討をするものになったが、こうした模索が、東西文化の交流における諸芸術の相関性、日本の芸術と文化の価値の研究に関して多少なりとも寄与するものがあればありがたいと考えた。以下、本書の構成を追って、章ごとの内容を概括的に紹介しておきたい。

第一部では、文芸に見られる東西の自然観について考察した。まず第一章で、マラルメの詩と思索において、創造主体のあり方、創造的無の認識について検討した。彼の自然観に人工の自然の把握を確認し、そこから日本美術の時空間にうかがえる主体のあり方と自然の表現との相違性を推察した。これを手掛かりに第二章で、

ことばとイマージュに関わる主体のありかを求めて、俳句の仏訳およびフランス・ハイカイの吟味によって浮上する「主体」の様相と自然の表現について検討した。ここで、自然と芸術と人間に関わる文化の相違を照らし出し、「無」「空無」の思索を振り返ることになった。これらを総合する形で第三章において、創造主体の言語表現の晦渋に由来するマラルメの詩想の難解さとそれに対するイマージュ表現の必然性、そして日本の詩、とりわけ絵とことばの融合に妙味がある画人俳人の与謝蕪村の俳句の表現について考察した。そこからマラルメの日常・非日常における表現対象、そこに隠された非分析的主体の曖昧な表現と、日本美術におけるそれらに関連する表現対象・主体表現とを、両者の自然観のうちに再確認し、それぞれに異なった経緯と思想を経つつ、ことばと絵が繋がることに対する各々の必然性を、「主体」の文化的相違と照らし合せながら推論した。ここに創造における「無」の認識が検証でき、生と芸術における「遊び」の感覚が浮かび上がった。そして最後に第四章で、こうしたことに意識的であった日本文化論・記号論のロラン・バルトによる思考、「ことばの不透明性」「無」の思索、俳句と日本文化の「遊戯性」、そして彼が「マラルメの部屋」と見做す「象徴」の問題について検討した。以上第一部を、常にマラルメの詩的实践と思索を各々の場での角度から顧みながら考察した。

第二部では、第一部で根本的な問題として浮上した、創造における「無」「空白」とそれに関わる「逆説性」について探究した。第一章で、まず創造の中核としての芸術における音楽性に関して逆説性を考察することになった。マラルメを師と仰ぐクロード・ドビュッシー、そしてウラジミール・ジャンケレヴィッチ、ピエール・ブレーズの音楽ないし諸芸術に対する見解について検討し、次いで、ブレーズに導かれ、音楽に深く関わる画家パウル・クレー、同様の画家ジョルジュ・ブラックにおいて音楽思想を考察した。ブラック解釈の手立てとなったジャン・ポーランから東洋の思念に差し向けられ、そこで、東洋・日本側から、日本とフランスに生きた九鬼

周造、その芸術諸ジャンルに関わる時間論、並びに東洋に生きた西洋人フェノロサの自然観ないし文化観に見受けられるジャポニスムを瞥見した。次に第二章では、こうした、常に逆説的といふべき創造の思索を生み育んだ土壌の確認として、西洋と東洋の一九世紀後半から末にかけての歴史的状况を総括的に概観し、そこに散見されるジャポニスムを通して、時代の逆説性と芸術の本来の逆説性を再確認することによって、近代・世紀末の芸術文化を歴史的に明るみに出した。その上で第三章において、そのような世紀末文化に生き、社会と芸術の間で逆説的行為を実践し、その自然観と創造主体の問題において日本と深く関わった芸術家、社会と創造の逆説性を具現したひとりの芸術家を取り上げるようになった。すなわち、これまでと領域を変えて三次元の立体芸術のうち、しかし同様の問題意識を通して、近代から現代へと、時代と芸術を展開させた彫刻家オーギュスト・ロダンを考察した。そこに日本の自然観に繋がる「花子」の動態性への関心を見出した。また、高村光太郎のロダンへの心酔も確認した。上記第二部のここかしこで、やはりマラルメの思索、「空白」「無」、さらに抽象の意識に触れることになった。

続いて第三部で、そうした芸術表現の近代から現代への進展を、具体的にやはりことばと絵、そして関連して浮上した「書」、また現代日本画家の意思において探究した。まず第一章で、これまでの問題の中枢となるマラルメの思索を、常に参照してきた詩画作品「骰子一擲」の『幾何学的空白』において吟味し直し、芸術諸ジャンルにおける各々の可能性と不可能性および芸術の総合性、そして主体に関わる「余白」「無」および「線」「抽象」の核心的意味について本書の流れから再検討し、これを本部の出発点とした。そこで確認した諸芸術の相関性を現代へと進め、第二章でエドゥアール・マネからアンリ・マチスの創造性、「空白」「無」の意想について学んだ。まず、現代抽象画家マチスが手掛けた『マラルメ詩集』の線描挿画、そしてことばと絵に対する彼の思索

を検討して、そこに「主体」と照らしあう「余白」の意識を見出した。それは同時に、ジャポニスムに、また葛飾北斎への留意に繋がっており、その経緯から、アンリ・フォションを考察することへと結ばれた。それはさらに文化史家ロジェ・カイヨワと書家森田子龍の共同制作の検討へと導かれ、そこに、「線」と「空白」の意識を見、また、子龍のマチスへの深い共感を確認して、ジャンルと国境を越える探究となった。カイヨワの「遊び」、子龍の「無」の思索は、同時に第二部の九鬼周造の再確認ともなった。引き続き第三章で、字と絵の間にある「線」としての「書」について検討した。日本の書、世界の抽象芸術に繋がる書、その間の書の歴史、芸術観・文化観の歴史的考察となった。詩と絵、そして書においても、「余白・空無」を創造の核として確認した。ここに、岡倉天心、フェノロサの日本文芸観が関わってくる。これは翻ってまた、フランスの詩人マラルメ、ギヨーム・アポリネールから、スイスの図形詩の詩人でありマラルメの「骰子一擲」を自らの思索の出発点にしたオイゲン・ゴムリンガー、さらにゴムリンガーとマラルメを詩作の起点とした日本の向井周太郎のコンクリート・ポエトリーおよびビジュアルアートに繋がった。こうして現代へと、西洋と東洋をまたぎながら論を進展させた。そして第四章で、西洋に学び東洋に生き、現代文化を世界に示した、日本画家東山魁夷について吟味した。現代的といふべき静謐端正なデザイン性をもつ、自然を対象とするその画布に、日本本来の自然観と文化の意識かつ図案的抽象的な創造性、そして創造主体ひいては自然と人間との繋がりのあり方を見た。それは、絵とことばによって現代社会への思いを伝えるものでもあった。

第四部では、第三部における具体的な芸術創造の現代への展開を受けて、その現代性について根拠から将来を省察するために、まず第一章で理論的に、時間と文芸を考察した九鬼周造の文芸理論、および日本文化と外国文化との相照について検討した。その比較芸術——芸術諸ジャンルに対する時間的分析に、線のリズム、沈黙の音

楽等、総合的表現性ないしは日本芸術の「無限」の解明を認め、同時にそこにフランス象徴主義との共鳴また齟齬をも見た。次に第二章で、九鬼が精神の父と見做す岡倉天心と共に、近代日本において日本の伝統文化を広く世界に示したフェノロサについて、自然に基づく総合芸術観・仏教観において、文芸文学の本質、レ内在的諸関係の調和レとしての音楽性の重視、ないし無限と流動の思考を探索することになった。そこにマラルメとの、これまで明らかにされることのなかった繋がりを見た。それを具体的に探究するために、第三章で、従来、美術・宗教・文化の領域に位置づけられるフェノロサの思索について検討した。それは、文学をも含み、否、むしろ文学・文芸を出発点とし常に芸術諸ジャンルを照らし合わせながら文化の総体を眺めていたフェノロサの思索の発掘として、具体的にその文学観を遺作『漢字考』『能楽論』において考察するものである。そこで、アメリカ人イマジストのエズラ・パウンドとアイルランドの劇詩人ウィリアム・バトラー・イェイツのフェノロサ継承によって世界の文学に通じる虚構・虚無・空白・象徴性の様相を明るみに出し、それが美術界での運動や思索と歩みを共にし、文化観に繋がること、そこには西洋人ながらアメリカ人としての特異な側面があること、しかしながらマラルメと共鳴する芸術の逆説性、自然観、主体の問題、レ無レの意識、象徴主義の問題が文化史的に考察されていることを指摘した。これは、パウンド、イェイツ、さらにマラルメによってポール・クロードル、そして第一部以来たびたび参照してきたバルトに繋がるものであり、それによって、従来、美術の領域、文化・宗教の領域で研究されていたものの、必ずしも全面的には価値が評価されていなかったと考えられる急逝の文化史家フェノロサの功績に対して、文学関係の考察を取り込んで統合的に価値づけることとなったと思われる。それは同時に、芸術諸ジャンル、東西の文芸文化の交流における、共鳴と齟齬を総体的に明らかにするものでもあったと考えられる。ここに、響きあう東西文化、すなわちその共鳴と齟齬を改めて発見することになった。それは、

より豊かに現代世界の芸術と文化を育むものになるのではないかと思われた。こうして、ことば・文学、絵・美術、音楽といった芸術諸ジャンル、さらに西洋と東洋の国々、そして、近代から現代に向けて試みた学びの視点の意味を表明しえたかと思う。マラルメの価値のより広い認識のための一助となるだろうか。また、フェノロサに対して新たに文学的価値を付加し統合することで、より広範な価値の発掘にいくらかでも貢献しうるだろうか。また、マチス、ロダン、そして「書」、魁夷を、マラルメの光が照らし出す象徴主義の風土から、自然と無と逆説の観点における繋がりとして、個々にいくらか新たな価値を付与できるだろうか。

以上を構成する章は、単独に学会誌や大学紀要等で自らの探究の道筋に導かれて書かれたものであり、当初はそれら書きためた論考を概ねそのまま配置して編成するつもりであったが、そのプロセスにおいて、むしろ薄暗がりの紆余曲折のなかで一貫した自らの思索を改めて確認することになった。それゆえ、ひとつの書物となるよう手を加えた。もとよりずいぶん以前、また折々の必要に応じてまとめられた論文に対して内容を部分的に大きく修正することはできず、互いに重複する部分を個々の論文において十分に整えて過不足なく他と切り離すこともできず、完全に一本化された書物にするのは極めて困難だったが、可能な限り、自らの思索の一本の道を明らかにしたいと考えた。実にこの作業が時間的に予想以上に手間取り、当初の予定を遙かに長引かせた。いちいちの文献を見直し、思いがけない誤りを十分に修正する余力もなく、精神的にも苦澁を味わわせるものとなったが、結果的には、長年の自身を振り返り反省し断念する機会となり感慨深かった。ご叱正を賜わりたい。

領域をまたぎ、時間を隔て、時々々の執筆事情があり、その意味で章ごとにレベルに高低もあり、いずれに対しても自信をもてるものではないが、手探りで、すべてマラルメを近く遠くに置き、世界の歴史と文化、諸芸術の

間に在る「関係の糸」をたどりながら進めてきたものである。そして、それはとりもなおさず、私自身の、形を成さなかった若い頃からの断片的な関心と物思いに応じ、少なくともそれをいくらか明確にするものでもあった。日本の文芸、その自然観、そして自然に融和する創造主体、人間、生と芸術の連続と融合としての「遊び」、そこにある逆説性と必然的な「無」の意識、それらを射出すいわば「抒情と抽象」言い換えれば象徴性を、ひとりの日本人のアイデンティティーとして、外国文芸と照らし合わせ確認するプロセスでもあった。

このようにして、マラルメの詩と思索のファセットが静かに長く照らし出す多様な芸術世界、そしてそれによつてたどり着いた、マラルメとは一見異質のフェノロサの美術運動、これまで結びつけられることが恐らくなかったその思索とマラルメ世界との照応を、まさに東洋文化・日本文芸・ジャポニスムを通して、探索するものとなった。

ここに、自分なりに考えあぐねた道筋のなかで見届けたささやかな「マラルメの光芒」と「フェノロサの反影」、それらの間に見出すことになった実に多様な、人間と創造と文化の断片たち、ひとつの視点からの一貫した断片群を描き出そうと試みた本書が、陽の目を見ることになったこと、その間に多くの方々から賜ったもの、自ら吸収できず消失させたものを思い起こし、今はただ、感謝の念にたえない思いがする。

宗像衣子

目次

まえがき

I 文芸に見る自然観

一 マラルメの「無」…………… 3

はじめに…………… 3

1 人工的自然と創造的無…………… 3

2 日本美術における時空間の一特質…………… 12

3 自然の描写に関わる相違性…………… 19

4 「主体」をめぐる文芸の照らしあい…………… 21

おわりに…………… 25

二 俳句とハイカイ…………… 28

はじめに…………… 28

1 俳句の仏訳が示す主体表現の異同…………… 29

2 ハイカイとシュールレアリスム、断片と組合せ…………… 40

3 ことばによる絵、自然に融合する主体…………… 45

おわりに…………… 46

三 ヌ主体の表現……………49

はじめに……………49

1 マラルメの抽象的イマジユ、日常と非日常、創造と遊び……………50

2 画人俳人・蕪村が描くことばとイマジユ……………60

3 日本の絵、イマジユが現前させる非分析的 ヌ主体……………69

4 ジャポニスムにおけるマラルメの位置……………76

おわりに……………87

四 バルト再考……………91

はじめに……………91

1 『零度のエクリチュール』、ことばの透明性……………92

2 『表徴の帝国』、俳句の無響性と「マラルメの住み処」……………95

3 芸術諸領域に通底する無目的性・遊戯性……………98

4 日本における俳句の展開……………102

5 言語と文化における自然……………104

おわりに……………107

II 創造における逆説性

一 中枢としての音楽……………113

はじめに……………113

1 マラルメの「骰子一擲」における ヌ沈黙の楽譜……………115

二	世紀末芸術の錯綜	136
	はじめに	136
	1 西欧近代、社会の波乱と生成	137
	2 芸術文化の変貌	140
	3 西欧芸術の動向、東洋への注目	141
	4 明治日本の芸術事情	153
	5 芸術の本質、様々な両義性	156
	おわりに	157
三	ロダンが結ぶ社会と芸術	158
	はじめに	158
	1 アール・ヌーヴォーおよび文学世界との交わり	159
	2 自然賛美と日本芸術への感興、《花子》の動態表現	162
	3 リアリズムと抽象、現代芸術へ	173
	おわりに	176

III 芸術表現の交流

一 マラルメの「骰子一擲」から

- はじめに 187
- 1 図形詩「骰子一擲」、偶然の思索 188
- 2 ことばのあり方 191
- 3 音楽の可能性と限界 194
- 4 視覚芸術の可能性と限界 197
- 5 「骰子一擲」に実現されたジャンル総合の意味 199
- おわりに 202

二 マチスの「余白」、現代へ

- はじめに 205
- 1 マラルメの「空白」とマネ、東洋への傾倒 206
- 2 マチスの挿画『マラルメ詩集』と『画家のノート』、「余白」と日本版画への憧憬 211
- 3 フォション・カイヨワ・書家森田子龍、ジャンルと東西の架け橋 219
- おわりに 226

三 詩と絵と書における「空無」

- はじめに 231
- 1 書は文学か美術か 232

2	マラルメ・アポリネールから具体詩ゴムリンガーへ	235
3	バゼーヌにおける「白紙」の発展	239
4	現代抽象芸術への道筋	240
5	抒情と抽象の多様な表象	242
	おわりに	245
	四 東山魁夷が紡ぐ東西芸術	250
	はじめに	250
1	戦後の決意、自然への志向	251
2	日本・ドイツ・北欧、自然の生成と衰滅	253
3	自然の循環と人の命を描くイマージュとことば	254
4	写生から象徴・デザインへ、現代社会への思い	266
	おわりに	269
	IV 伝統文化の現代性	
	一 九鬼周造とフランス象徴主義	275
	はじめに	275
1	「文学の形而上学」、文学・音楽・美術を繋ぐ時間論	276
2	フランス講演「日本芸術における「無限」の表現」	282
3	フランス象徴主義の解釈、偶然性と「全」と「全」	291
	おわりに	299

二 フェノロサの総合芸術観 307

はじめに 307

1 東西文化の意識、自然への畏敬 308

2 芸術ジャンルの総合性と音楽の優先的位置、内在的諸関係の調和 309

3 文学論「文学の理論に関する予備的講義」における「流動」 310

4 世紀末文化の共有、パリ、部屋の詩人、と大津、三井寺の僧 314

おわりに 319

三 フェノロサ『漢字考』と「能楽論」の文芸価値 323

はじめに 323

1 遺作『漢字考』、自然に依拠する「思想絵画」、具体と普遍のハーモニー 324

2 遺稿「能楽論」、ことばと舞における「無」、虚構と抽象 329

3 パウンドとイエイツの継承、フェノロサの象徴主義 335

4 美術運動と支えあう文学認識、現代を見晴らした文化史家 337

おわりに 339

あとがき

初出一覧

参考文献

図版一覧

人名索引

一 マラルメの「無」

はじめに

ことばの表現のうちに、思想ひいては文化の反映が見られるように、絵の表現にも思想や文化のあり方が見受けられるだろう。ここでは、ジャポニスムが風靡する時代に生きた一九世紀フランス象徴派詩人ステファヌ・マラルメ（一八四二―一九八）のことば、すなわち詩と詩的思考における表現と、日本美術が示すいくらかの表現上の特質との関連について考察したい。マラルメの思想の中心に窺われる非西洋的思考と、日本美術に垣間見られる時間や空間の感覚、自然観、創造主体の意識、そうした事柄との共通性や差異性を明らかにすることによって、さらには、そのような観点にかかわる他の芸術ジャンルの創造者たちの思考における多様な東西文芸の響きあいを瞥見することによって、ことばと絵を同等の芸術創造のレヴェルから考えることができる様子を確認したいと思う。そこに、こうした考察が思想や文化の探究において価値をもつ有様が見られることになるだろう。

1 人工的自然と創造的無

本論のテーマに即して、マラルメの詩と詩的思考において自然のモチーフとしての花がどのように見られるか、それに関連して、詩における「無」の意識や空白の感覚がどのように捉えられるか、そしてそれらを描出する語

彙や語法から、創造主体ないし主体としての人間のあり方とそれにまつわる表現にどのような難解さが窺えるかについて検討したい。

i 詩一篇

以下は、一八八七年『独立評論』誌に初出、そして同年、『マラルメ詩集』に収録された詩篇群であるが、常に三篇一体として扱われているもののうちの二篇である。ここで取り上げない第一詩篇では、詩人の夕暮れの部屋、花卓子のみがとり残された部屋の光景がうたわれている。次に挙げる二篇のうちの前者、第二詩篇は、夜半、花瓶の花が欠けている様子を、そして後者、第三詩篇は、夜明け、かすかな期待を孕みながらも、何も生まれなかった様子を描く詩篇であり、これら三詩篇は、詩人の部屋における「詩」の不在を浮き彫りにする一連の詩群と言えるだろう。第二・第三詩篇から、関連モチーフを示す部分を掲げたい。

第二詩篇「壺の腹から 一跳びに躍り出た……」⁽²⁾の第一詩節と第四詩節

かりそめの脆いガラスの壺の腹から

一跳びに躍り出た 頸、

苦悩の夜のよすがらを 花で飾る術もなく、

口は かけこぼたれて 知るよしもない。

一輪の薔薇の花を 暗闇に予告しながら、
ひたすらに唯 悶え苦しみ、しかも
何物をも 吐き出すことを肯じない。

この詩では、あるべきはずの一輪の薔薇の花が存在していない様が表されている。夜もすがら、花瓶に飾られることのない花。花瓶の首や口は、[〃]無い花[〃]を露わにする。後にその一端を見るマラルメ独自の語法と語彙に照らせば、[〃]詩[〃]が生み出されなことを如実に語っていると云えるだろう。

冒頭第一詩節から、成就しなかった花瓶と花との合体、それをめぐる夢想、孤立といった風に、空虚な状況ばかりが、表現として積み重ねられている。無い、[〃]という[〃]ことが、[〃]無い花[〃]の表象として描かれている。

ところで、この[〃]無い花[〃]は、さらに自然との関係において、どのようなものだろうか。花瓶に飾られるべく切り取られてあるはずの花であり、たとえ存在したとしても、それは、自然の中に息づき、咲き薫る花であったわけではない。自然から切り離されて飾られる、いわば人工的な花と言えるだろう。この点に注目しておきたい。

第三詩篇「ダンテル編みの窓掛は自づと……」⁽³⁾の第二詩節と第三詩節

絡み合う唐草飾り花飾りの 白と白との

一面に纏れに纏れたこの真白さが、蒼白い

窓玻璃にあたって消えて、屍衣で覆ふ

白さにまさり 翩翩とひるがえっている。

けれども 夢で金色に彩られる人の心には、

音楽的な空洞の虚無を たたえて

悲しそうに マンドールが眠っている、

この詩では、明け方、シ無クをたたえた寢床に揺れるカーテンの姿が現れている。カーテンの模様、すなわち、纏れ合いフーガのようにめくるめくそれ自身を追いかけてゆく白と白の唐草模様、自らに自らを重ね追ってゆくような花模様が、天空へと連なってゆく。詩人の楽器の腹部から、シ詩クの誕生は、やはり見られない。白の中で、無限に繰り返される花飾り模様が、連鎖し立ち上ってゆくだけの夜明けである。

生まれなかつた詩人の音楽が、流れ去りゆく花のモチーフとともにある。この花は、しかしここでも、揺れるカーテンの中でいわばデザイン化された花であり、自然の風景に生きて咲く花ではない。人間の視覚で形成された花である。そして花は、模様として宇宙へと繋がる。

自然から切り取られた花が、視覚の中で拡大されたような花飾りの植物模様となつて、浮上してゆく。それは、自然に繋がるというよりは、窓枠を越え、天空へと立ち上り、宇宙に繋がっている。カーテンの模様と宇宙との大小関係の非写実性も浮かび上がる。そしてこれらの全体を包むのは、やはり現実のシ無クである。

このように自然の中の植物である花のモチーフが見られるが、それは自然の風景の中の花としてあるのではな

あとがき

本書を纏めながら振り返ってみて、多くの先生方や周囲の皆さまから様々なご恩を受けてきたことを感慨深く思う。京都大学文学部生の時、フランス文学専攻において本城格先生からルネサンス文学のご研究を通して社会と人間心理のありさまについて、中川久定先生からは一八世紀啓蒙思想のご研究から社会と文学に関わる実証研究の重要性について学んだ。その後、卒業論文（マラルメの扇の詩をめぐる虚無の考察）の試問を機縁に英文科の御興員三先生のご研究に接することになったが、フランス文学専攻であったにもかかわらず大学院生の時に受けた先生のご指導、その貴重さは今にいたるまで忘れられない。御興先生から「詩」の何たるかを学んだ気がする。三好郁朗先生のマラルメのご講義も大切であった。神戸大学で長く非常勤講師をさせていただいた時には、拙い論文に対して、木内孝先生がいつも親身に勇気づけてくださった。先生は、マラルメ研究の第一人者、立教大学の松室三郎先生のご友人であったが、その関係もあつて松室先生にも遠くから常にあたたかいお言葉をいただいた。こうした先生方のご支援がなければ、私自身の関心は先生方とは異なるものに方向づけられたとはいえ、マラルメにこだわり自分なりに接し続けるということはおそらくなかったと思う。

このような学びのなかで、元をただせば、昔から引き継がれたすぐれた翻訳研究はほんとうに重要であった。鈴木信太郎先生のフランス詩研究をはじめとして、前記松室先生、そして菅野昭正先生、清水徹先生、阿部良雄先生、渡邊守章先生ほか諸先生方による『マラルメ全集』全五巻は、常に限りなく大きな支えであった。ワープロもパソコンもインターネットもない時代からの、先生方の地道で丹念な、膨大なお仕事・ご研

究から学ばせていただいたことを思うと感謝の念もひとしおである。昨今のマラルメ研究者では、ずいぶん以前、駆け出しの頃に、若き竹内信夫先生から受けたご指導も折々思い出す。マラルメ・記号論の西川直子先生、マラルメ・言語思想研究の佐々木茂子さんも、いつも闊達に支えてくださった。一方で自身はといえば、若い方々に何もできないまま、ただ応援したいと思うばかりであった。

フェノロサに関しては、その機縁を作ってくださった山口静一先生や村形明子先生、その遠大なご翻訳やご研究の成果から受けたものは計り知れない。一筋の長年の研鑽というものの価値を実感させていただいた。また学びの道筋の中で、このたび特に英文学・アイルランド劇詩イエイツ研究の長谷川年光先生の貴重なお仕事から多大な恩恵を賜ったことは、まさに本書をまとめるにあたって幸甚であった。フェノロサ学会で、神林恒道先生から、美学芸術学のご専門領域のみならず文化全般に関わる広く深甚なご教授とお導きを身近に賜ったことは幸運に恵まれたというほかない。

また高階秀爾先生の東西芸術研究のお仕事、芳賀徹先生の東西文芸のご研究や川本皓嗣先生の比較文学のご著書、磯谷孝先生の記号論のご研鑽も、以前から折に触れては学ばせていただいた土台であった。音楽・文芸思想に関しては、三光長治先生の龐大なワグナーのご研究は深く導きの元であった。長く非常勤講師を務めさせていただいた京都市立芸術大学大学院で、多くの音楽家の方々から、一味ちがったことはで音楽の本質に接することができたのも恵まれていた。さらにこのたび本書のために、マチスの『マラルメ詩集』の挿画のご厚意を賜った姫路市立美術館の山田真規子さん、並びに、書家森田子龍による、マチスと書に関わる「東西の虹」について貴重な情報を賜った豊岡市文化振興課の徳味卓示さんに深く感謝申し上げます。また日本に居ながらにして、パリ郊外のマラルメ美術館のベギー・ジュネステイさんたちから賜った懇篤なご支援・情報提供等について心より深謝したい。フランスでは、文学・芸術・文化について学

んだものの、帰国後は渡欧もままならなかったが、多様な学会から実に多くを学ばせていただいた。

パリで、留学後もいつも遠くから支えてくださった硯学ミッシェル・デコーダン先生、先生を指導者とさせていただけなければ失われたことがたくさんあった。心底が把え難かっただろう大胆で頑なな東洋の女の子にもどかしさも見せず、浩然として鷹揚であった。「マラルメ」を博士論文のサブタイトルにしか上げずにタイトルを「抒情と抽象」としたことに、今、ペール・ラシェーズの墓地から微笑んでいただけるだろうか。マラルメは手掛かりにすぎなかった。しかし大きな手掛かりではあった。マラルメ研究の場にあつては微力故に一種の空しさを、諸々の他領域にあつては同じくある種の歯がゆさを感じた。どこにも落ち着けず、自らの足場は常に外にあり不安定であった。伝え難く口を閉ざすほかなかった。デコーダン先生の文学と芸術と文化のお導きは、その後の私の問題意識を堅固に形作ってくださった。後を継がれたクロード・ドゥボン先生のやさしさとおおらかさも日々の支えだった。そんな先生方を繋いで、いつもパリとの仲介をしてくれた友人、九鬼周造の研究者斎藤多香子さんには感謝のこともない。彼女の助力がなければすべては展開しなかった。日本でも、その後多くの友人の恩を受けながらそれを十分に育てさせていただく余裕がなかったことが悔やまれる。ただただ時間に追われて日々を過ごす年月のなかで、亡き人となられた多くの先生方が、フランスにも日本にもいらっしやう。自分ひとり日常の時間に急かされているうちに、時はどんどん他の人々のそれぞれの時間として過ぎてゆく。後悔が尽きない。振り返り、今ならわかるということばかりである。

今、先立つ拙著を振り返らざるをえない。このたびの、おおよそ一年におよぶ、日々現実の波を掻い潜って細々と拾い集めた時間と体力による書物作りの作業を思い起こし、編集者の方の大きな力を思わずにはいられない。最初の拙著『マラルメの詩学』の時には右も左もわからない筆者に、おそらく呆れながらも気持

よく根気よく、確かなご経験によって導いてくださった元勤草書房の伊藤真由美さんにはやはり感謝のことばしか浮かばない。次の拙著『ことばとイマージュの交歓』では、やはり大ベテランの人文書院元編集長、谷誠二さんがいくつものわがまを聞いてくださりながら、しかしさりげなく的確な道筋を作ってくださいました。その辛抱強さ、ご厚情にやはり深く感謝したい。お二人共に、ご定年前の豊かなご見識を注いでくださいました。ただその折々には、お二人の編集のお力、その価値を十分に感じる事ができていなかった、と今になって思う。この場で改めて感謝の意を記させていただきたい。

それを今さらながら思わせてくださったのは、このたびの思文閣出版の大地亜希子さんである。お若い力でいつも真剣に率直に、強く支えてくださった。家庭の事情や自身の病気や不調にしばしば見舞われるなかで、変わることなく信頼させていただけたお人柄はほんとうにありがたかった。後日、偶然、大地さんが間接的に父をご存知だったとわかり、ご縁を感じた。美学美術史学の父からもっと教えてもらっておけばよかったと今さらながらこれも後悔する。なぜかしらアンフェアな気がして、わざと教えを受けなかった。父も自分からそのような話をしない、怒のない雲の上の仙人のような人だった。ただそれなのに、今、似た感性や思索の片鱗を感じてしまう。人は、どこからどう何を受け継いでゆくのだろうか、不思議だ。

私事繋がりで恐縮だが、最初の書物出版の時、幼かった子供たちは大きくなり、別の家庭を作り、またその子がこの春生まれた。子供たちと走り回った子供犬が今、入退院の度に弱る母の傍にくっつき私の不器用な介護を目で追う。次々悩まされる大学勤務の中で、愚直に向き合っては自ら歴大な時間を空費し、そのために寸暇を惜しまざるをえなかった生活と仕事によって、家庭や子供たちにはずいぶん皺寄せを及ぼした。その代わりにもならないが、今、夫の理解を得て、母の世話ができることをありがたいと思う。引き継がれる人生のめぐりを実感する。今ならわかる、ということがほんとうに多いこのごろである。

幼い日、茫洋と深淵なふところのように感じた散歩道、京都左京区の東山山麓、鹿ヶ谷の「哲学の道」が今、細く短く小さく、いくぶん明確に見える。夕日に黒谷の塔のシルエットを眺め、法然院の蟬しぐれに耳をつんざかれ、現実の形と音から身を離して遊んだ小さな姿が思い浮かぶ。曖昧模糊とした古い京都に生まれ暮らしたのち、パリでは、異質の明澄な現実感覚を覚えた。幽遠さと明晰さ、それらに不思議な優美の繋がりを感じた。あまり心情は変わらない。同じ核を中心に膨らんだだけと思えるが、そんなものかもしれない。ただ、いくつもの後悔が、文字通り走馬灯のようにめぐる。今、大津比叡山の中腹にいて、昔とは異なるこの地の花が咲き、鳥が鳴き、小さな庭に四季がめぐる。ままならぬことのみ多いと思ったが、幸運だった気もする。

大きすぎた「マラルメ」から引っぱり出した細い糸を紡いだささやかなアッサンブラージュとしての本書、つぎはぎの組み合わせを織ったその「宇宙に張り巡らされた律動的な関係の糸」は、「抒情と抽象」、芸術や文化における逆説性、つまりはただ、雨上がりの光に一瞬見えた「東西に架かる幻の虹」だったのだろうか、何かしら小さな支えになるかもしれない。これから書きたい別種のものがある。やつとそれにとりかかれる気がする。

比叡平にて 二〇一五年七月

宗像衣子

初出一覧

(以下の初出論文は本書の一本化のために適宜加筆修正が施されている)

第一部 文芸に見る自然観

- 一 「芸術の響き合い・文化の響き合い——マラルメの無と日本美術における自然観——」
(神戸松蔭女子学院大学『研究紀要』第四七号、二〇〇六年)
- 二 「ことばと文化——俳句の翻訳とハイカイ——」
(京都市立芸術大学『ハルモニア』第三五号、二〇〇五年)
- 三 「詩と絵と文化の東西——マラルメの主体・日本の自然観——」
(京大大学仏語学仏文学研究室『仏文研究』吉田城先生追悼特別号、二〇〇六年)
- 四 「ロラン・バルト再考——日本文化をめぐって——」
(神戸松蔭女子学院大学『研究紀要』第五〇号、二〇〇九年)

第二部 創造における逆説性

- 一 「芸術の総合性、音楽の中枢性、文化の相互性——マラルメから現代へ——」
(京都市立芸術大学『ハルモニア』第三八号、二〇〇八年)
- 二 「世紀末芸術——逆説性と価値——」
(神戸松蔭女子学院大学『研究紀要』第五一号、二〇一〇年)
- 三 「ロダンの近代性——社会と芸術に関わる総合性と逆説性——」
(神戸松蔭女子学院大学『研究紀要JOL文学部篇』第三号、二〇一四年)

第Ⅲ部 芸術表現の東西交流

- 一 「マラルメにおける総合芸術性——『骰子一擲』の価値——」
（神戸松蔭女子学院大学『研究紀要』第五二号、二〇一一年）
- 二 「マラルメとマチスをめぐって——余白の詩・余白の絵——」
（京都市立芸術大学『ハルモニア』第三七号、二〇〇七年）
- 三 「芸術創造における空無の意識——詩と絵と書の東西——」
（神戸松蔭女子学院大学『研究紀要JOL文学部篇』第二号、二〇一三年）
- 四 「東山魁夷の芸術——色と形の表現性——」
（神戸松蔭女子学院大学『研究紀要JOL文学部篇』第一号、二〇一二年）

第Ⅳ部 伝統文化の現代性

- 一 「九鬼周造の文芸思想とフランス象徴主義」
（神戸松蔭女子学院大学『研究紀要』第四八号、二〇〇七年）
- 二 「フェノロサの文学観——マラルメから管見——」
（日本フェノロサ学会『ロータス』第三一号、二〇一一年）
- 三 「フェノロサの文学的価値——『漢字考』と能楽論の芸術的文化史的位置づけ——」
（日本フェノロサ学会『ロータス』第三四号、二〇一四年）

ら			
ラヴェル, モーリス			
Maurice Ravel 1875-1937	289		
ランガー, スザンヌ K			
Susanne K. Langer 1895-1985	333		
ランボー, アルチュール			
Arthur Rimbaud 1854-91	93, 121, 143		
り			
リュード, フランソワ			
François Rude 1784-1855	164		
リルケ, ライナー マリア Rainer Maria			
Rilke 1875-1926	145, 162, 165, 168		
る			
ルドン, オディロン Odilon Redon 1840-1916			
	117, 142, 144, 197, 316		
ルノワール, オーギュスト Auguste Renoir			
1841-1919	142, 144, 173, 197, 316		
ろ			
ローデンバック, ジョルジュ			
		Georges Rodenbach 1855-98	144
		ロートン フレデリック Frederick Lawton	
		?-?	167
		ロセッティ, ダンテ ガブリエル	
		Dante Gabriel Rossetti 1828-82	148
		ロダン, オーギュスト	
		Auguste Rodin 1840-1917	
			158~169, 171~177
		ロップス, フェリシアン	
		Félicien Rops 1833-98	144
		ロンサール, ピエール ド	
		Pierre de Ronsard 1524-85	216
わ			
		ワーグナー, オットー	
		Otto Wagner 1841-1918	147
		ワーグナー, リヒャルト Richard Wagner	
		1813-83	22, 101, 119, 143, 145, 196, 289, 317
		ワイルド, オスカー	
		Oscar Wilde 1854-1900	79, 148

	114, 122, 124
ポター, ピアトリクス	
Beatrix Potter 1866-1943	149
ポッジ, ジュゼッペ	
Giuseppe Poggi 1811-1901	152
ポッシュ, ヒエロニムス Hieronymus Bosch	
1450頃-1516	144
ホフマンスタール, フーゴー フォン	
Hugo von Hofmannsthal 1874-1929	145, 147
ホメロス Homēros	150
ま	
マイヨール, アリステイッド	
Aristide Maillol 1861-1944	176
正岡子規 1867-1902	102
マチス, アンリ Henri Matisse 1869-1954	
82, 205, 209, 211~213, 216~219, 224	
松尾芭蕉 1644-94	
29, 32, 33, 36, 37, 41, 59, 102	
マネ, エドゥアール	
Edouard Manet 1832-83	
78, 83, 85, 117, 197, 205, 209~211, 244, 316	
マラルメ, ステファヌ Stéphane Mallarmé	
1842-98 3, 5, 7, 8, 10~12, 19, 22~24,	
49~55, 57, 58, 66, 76~79, 83~88, 91, 92, 94	
~98, 100, 101, 107, 113, 115~119, 121, 125,	
143, 160, 169, 173, 187~189, 191~194, 196	
~201, 203, 205, 206, 209, 211~213, 216, 226,	
227, 231, 232, 235~239, 241~244, 275, 276,	
294, 297~300, 307, 308, 313~320, 323, 333,	
336~338, 340, 341	
マン, トーマス Thomas Mann 1875-1955	145
み	
ミケラッツィ, ジョヴァンニ	
Giovanni Michelazzi 1879-1920	152
ミケランジェロ, ブオナローティ Buonarroti	
Michelangelo 1475-1564	159, 164, 177
ミショー, アンリ	
Henri Michaux 1899-1984	100, 125, 244
ミュシャ, アンフォンス	
Alfons Mucha 1860-1939	142
ミルボー, オクダーヴ	
Octave Mirbeau 1848-1917	160
ミレー, ジョン エヴァレット	

John Everett Millais 1829-96	148
む	
向井周太郎 1932-	243
め	
メアリ, フェノロサ	
Mary Fenollosa 1865-1954	324, 329
メーテルリンク, モーリス	
Maurice Maeterlinck 1862-1949	144
も	
モークレール, カミーユ	
Camille Maclair 1872-1945	167
モース, エドワード S	
Edward S. Morse 1838-1925	330
モーツァルト, ヴォルフガング アマデウス	
Wolfgang Amadeus Mozart 1756-91	147
モネ, クロード Claude Monet 1840-1926	
77, 140, 142, 160, 172, 173, 197	
森鷗外 1862-1922	155, 162
森槐南 1863-1911	324
モリス, ウィリアム	
William Morris 1834-96	144, 148
モリス, シャルル	
Charles Morice 1861-1919	295
森田子龍 1912-88	206, 219~224, 234
モンテルラン, アンリ ド	
Henri de Montherland 1896-1970	212, 213
や・ゆ	
ヤコブソン, ローマン	
Roman Jakobson 1896-1982	193
ユゴー, ヴィクトル	
Victor Hugo 1802-85	220
よ	
横山大観 1868-1958	154
与謝蕪村 1716-83	
29~31, 35, 36, 38, 59~65, 67, 102	
与謝野晶子 1878-1942	155
与謝野鉄幹 1873-1935	155
吉川幸次郎 1904-80	234

ハイデッカー、マルチン	
Martin Heidegger 1889-1976	283, 292
ハイドン、フランツ ヨゼフ	
Franz Joseph Haydn 1732-1809	147
ハウエルズ、ウィリアム ディーン	
William Dean Howells 1837-1920	150
パウンド、エズラ Ezra Pound 1870-1964	
243, 324, 325, 327, 329~332, 335, 336, 339	
橋口五葉 1880-1921	155
橋本雅邦 1835-1908	154
バゼーヌ、ジャン	
Jean Bazaine 1904-2001	239, 241
服部嵐雪 1654-1707	33
花子(太田ひさ) 1868-1945	160, 171
バルザック、オノレ ド	
Honoré de Balzac 1799-1850	143, 173
バルト、ロラン Roland Barthes 1915-80	
23, 24, 46, 91 ~ 102, 104, 105, 107, 336, 337, 339, 340	
ひ	
ピアズリー、オーブリー ヴィンセント	
Aubry Vincent Beardsley 1872-98	79, 144, 148
東山魁夷 1908-99	
250~255, 257, 259, 262, 264~269	
ピカソ、パブロ Pablo Picasso 1881-1973	
82, 151, 232, 240	
ビゲロウ、ウィリアム スタージス	
William Sturgis Bigelow 1850-1926	338
ピサロ、カミーユ	
Camille Pissarro 1830-1903	142, 144
菱田春草 1874-1911	154
比田井天来 1872-1939	234, 235
平田禿木 1873-1943	330
ピング、サミュエル	
Samuel (Siegfried) Bing 1838-1905	144
ふ	
ブルデル、エミール=アントワース	
Emile-Antoine Bourdelle 1861-1929	176
フェノロサ、アーネスト Ernest Fenollosa	
1853-1908 114, 126, 128~130, 154, 231, 233, 243, 307~311, 315, 316, 318~320, 323 ~327, 329~341	

フォション、アンリ	
Henri Focillon 1881-1943	205, 219, 220, 224
フォンタネージ、アントニオ	
Antonio Fontanesi 1818-82	154
ブガッティ、カルロ	
Carlo Bugatti 1856-1940	152
藤島武二 1867-1943	154, 155
二葉亭四迷 1864-1909	155
ブッチェーニ、ジャコモ	
Giacomo Puccini 1858-1924	153
ブラー、ロイ Loie Fuller 1862-1928	333, 334
ブラウニング、ロバート	
Robert Browning 1812-89	326
ブラック、ジョルジュ Georges Braque	
1882-1963 21, 22, 114, 122, 123, 240, 241	
ブリュエール、ピーテル	
Pieter Bruegel 1528頃-69	144
ブレ、ローズ Rose Beuret 1844-1917	162
ブレイク、ウィリアム	
William Blake 1757-1827	148, 220
ブレーズ、ピエール Pierre Boulez 1925-	
196, 113, 114, 117, 118, 121, 124, 125, 129	
フロベール、ギュスターヴ	
Gustave Flaubert 1821-80	143
へ	
ペイター、ウォルター	
Walter Peter 1839-94	148
ベートーベン、ルートヴィッヒ ヴァン	
Ludwig van Beethoven 1770-1827	147
ベッケル、グスタボ アドルフォ	
Gustavo Adolfo Bécquer 1836-70	152
ベルグソン、アンリ=ルイ	
Henri-Louis Bergson 1859-1941	283
ほ	
ホイッスラー、ジェイムズ マックニール	
James McNeill Whistler 1834-1903	79, 149, 150, 338
ポー、エドガー アラン	
Edgar Allan Poe 1809-49	77, 117, 210, 316
ボードレール、シャルル Charles Baudelaire	
1821-67 93, 143, 160, 165, 173, 275, 276, 291, 292, 297, 299, 300	
ポーラン、ジャン Jean Paulhan 1884-1968	

Alfred Sisley 1839-99	142
下村観山 1873-1930	154
シモンズ, アーサー	
Arthur Symons 1865-1945	148
シャルル, ルネ René Char 1907-88	216
ジャコテ, フィリップ	
Philippe Jaccottet 1925-	28, 40, 43, 46
シャルコー, ジャン=マルタン	
Jean-Martin Charcot 1825-93	147
ジャンケレヴィッチ, ウラジミール Vladimir Jankélévitch 1903-85	23, 113, 117, 119, 120, 196, 211, 226, 296, 297
シュアレス, アンドレ	
André Suarès 1868-1948	276, 290, 297, 300
シューベルト, フランツ ベーター	
Franz Peter Schubert 1797-1828	147
シュトゥック, フランツ フォン	
Franz von Stuck 1863-1928	146
シュトラートマン, カール	
Carl Strathmann 1866-1939 ?	146
シュトルム, テオドル	
Theodor Storm 1817-88	145
シュニツラー, アーサー	
Arthur Schnitzler 1862-1931	147
ジョイス, ジェイムズ	
James Joyce 1882-1941	121, 213

す

スーラ, ジョルジュ ピエール	
Georges Pierre Seurat 1859-91	142, 144

せ

世阿弥 1363?-1443 ?	333
セガンティーニ, ジョヴァンニ	
Geovanni Segantini 1858-99	152
セザンヌ, ポール Paul Cézanne 1839-1906	82, 118, 121, 123, 142, 160, 170, 172, 212, 218

そ

ソシュール, フェルディナンド	
Ferdinand de Saussure 1857-1913	98, 193
ゾラ, エミール Emile Zola 1840-1902	143

た

ダーウィン, チャールズ	
--------------	--

Charles Darwin 1809-82	138
高村光太郎 1883-1956	162
滝廉太郎 1879-1903	155
ダンカン, イザドラ	
Isadora Duncan 1878-1927	333, 334
ダンテ, アリギエリ	
Alighieri Dante 1265-1321	165

ち〜て

チェンバレン, バジル ホール	
Basil Hall Chamberlain 1850-1935	335
坪内逍遙 1859-1935	154
デュジャルダン=ボーメッツ, エティエンヌ	
Etienne Dujardin-Beaumetz 1852-1913	162
デリダ, ジャック	
Jacques Derrida 1930-2004	243

と

トウエイン, マーク	
Mark Twain 1835-1910	150
ドガ, エドガー Edgar Degas 1834-1917	79, 142, 197, 210, 217, 316
ドビュッシー, クロード Claude Debussy	
1862-1918	21~23, 113, 117~121, 125, 129, 143, 151, 196, 211, 213, 226, 276, 288, 289, 296, 316

な

中村不折 1866-1943	155
夏目漱石 1867-1916	155

に

新国誠一 1925-77	243
ニーチェ, フリードリッヒ ヴィルヘルム	
Friedrich Wilhelm Nietzsche 1844-1900	145, 293
西田幾多郎 1870-1945	235, 241

ね

ネルヴァル, ジェラルド	
Gérard de Nerval 1808-55	220

は

ハーン, ラフカディオ	
Lafcadio Hearn 1850-1904	337

Carrier-Belleuse Albert-Ernest 1824-87	172
カルドゥッチ, ジョズエ	
Giosuè Carducci 1835-1907	153
ガルドス, ペレス	
Pérez Galdós 1843-1920	152
ガレ, エミール Emile Gallé 1846-1904	142
川端康成 1899-1972	252, 258
鑑真 687-763	252, 261
カンディンスキー, ワシリー	
Wassily Kandinsky 1866-1944	25
カント, イマヌエル	
Immanuel Kant 1724-1804	292
き	
北園克衛 1902-78	243, 337
キャロル, ルイス Lewis Carrol 1832-98	149
く	
九鬼周造 1888-1941	114, 125, 127~129, 219, 224, 225, 227, 275~277, 282, 284, 286, 289~300, 307
九鬼隆一 1852?-1931	128
クシュール, ポール=ルイ Paul-Louis Couchoud 1879-1959	28, 29, 40, 45, 49, 58, 59, 68
ゲゼル, ポール Paul Gsell 1870-1947	162, 167, 169
クノップフ, フェルナン	
Fernand Khnopff 1858-1921	144, 145
クラデル, ジュディット	
Cladel Judith 1873-1958	160, 166
グラナドス, エンリケ	
Enric Granados 1867-1916	151
グリム兄弟, (ヤーコブ, ヴィルヘルム)	
Jacob Grimm 1785-1863, Wilhelm Grimm 1786-1859	145
クリムト, グスタフ	
Gustav Klimt 1862-1918	79, 146, 147
クレー, パウル Paul Klee 1879-1940	114, 122~125
クローデル, カミーユ	
Camille Claudel 1864-1943	159, 160
クローデル, ポール Paul Claudel 1868-1955	95, 99, 336, 337, 339, 340
黒田清輝 1866-1924	154
桑原武夫 1904-88	102, 104

け	
ゲオルゲ, シュテファン	
Stefan George 1868-1933	145
ケレルマン, ベルンハント	
Bernhard Kellerman 1879-?	289
こ	
孔子 552-479B.C.	311
ゴーギャン, ポール Paul Gauguin 1848-1903	79, 142, 144, 170, 172, 197, 316
コキオ, ギュスタヴ	
Gustave Coquiot 1865-1926	162
ココシユカ, オスカール	
Oskar Kokoschka 1886-1980	147
ゴッホ, フィンセント ファン Vincent Van Gogh 1853-90	77~79, 142, 144, 170, 173, 218
小林一茶 1763-1827	39
ゴムリンガー, オイゲン	
Eugen Gomringer 1925-	232, 242, 243, 337
小山正太郎 1857-1916	231, 233, 234
コラン, ラファエル	
Raphael Collin 1850-1916	154
ゴンクール, ジュール ド	
Jules de Goncourt 1830-70	82
ゴンズ, ルイ Louis Gonse 1841-1926	128, 338
さ	
酒井抱一 1761-1828	13, 70
鯨島看山 1893?-?	234
サリヴァン, ルイス	
Louis Sullivan 1856-1924	149, 150
サルトル, ジャン=ポール	
Jean-Paul Sartre 1905-80	92
サン=サーンス, シャルル カミーユ	
Charles Camille Saint-Saëns 1835-1921	143
し	
シーレ, エゴン Egon Schiele 1890-1918	147
ジェイムズ, ヘンリー	
Henry James 1843-1916	150
シェノー, エルネスト	
Ernest Chesneau 1833-90	79, 210
シスレー, アルフレッド	

人名索引

[人名の後に、欧文表記および生没年を確認できる限りで付した]

- あ
- 青木繁 1882-1911 154
 浅井忠 1856-1907 154
 アストン, ウィリアム ジョージ
 William George Aston 1841-1911 335
 アポリネール, ギヨーム Guillaume Apollinaire
 1880-1918 66, 232, 236~240, 242, 243
 荒木田守武 1473-1549 34
 有島生馬 1882-1974 162
 アルベニス, イサーク
 Isaac Albéniz 1860-1909 151
 アンゲル, ジャン オーギュスト ドミニック
 Jean Auguste Dominique Ingres 1780-1867 219
 アンソール, ジェームズ
 James Ensor 1860-1949 144
- い
- イエイツ, ウィリアム バトラー William Butler
 Yeats 1865-1939 148, 324, 329~337, 340
 石川九楊 1945- 232~235, 239, 241
 井島勉 1908-78 233, 234
 伊藤道郎 1893-1961 330, 334
 井上有一 1916-85 235
- う
- ヴァレリー, ポール Paul Valéry 1871-1945
 95, 127, 191, 225, 275, 276, 293, 294, 299, 300,
 336
 ヴァン デ ヴェルデ, アンリ
 Henri van de Velde 1863-1957 144
 上田桑鳩 1899-1968 234
 ヴェラーレン, エミール
 Emile Verhaeren 1855-1916 144
 ヴェルガ, ジョヴァンニ
 Giovanni Verga 1840-1922 153
 ヴェルディ, ジョゼッペ
 Giuseppe Verdi 1813-1901 153
 ヴェルレーヌ, ポール Paul Verlaine 1844-96
 143, 275, 276, 295, 299, 300
 歌川広重 1797-1858 78
 梅若実(父子) 1828-1909 (初代), 1878
 -1959 (二代目) 324
- え
- エジソン, トーマス
 Thomas Edison 1847-1931 150
 エックマン, オットー
 Otto Eckmann 1865-1902 146
 エリュアール, ポール
 Paul Eluard 1895-1952 124, 336
- お
- 大岡信 1931- 235, 241
 岡倉天心 1862-1913
 114, 128, 154, 231, 233, 234
 尾形光琳 1658-1716 13, 70
 荻原守衛 1879-1910 162
 オルタ, ヴィクトール
 Victor Horta 1861-1947 144
 オルリク, エミール
 Emil Orlik 1870-1932 146
- か
- カイヨワ, ロジェ
 Roger Caillois 1913-78 206, 219~223
 ガウディ, アントニオ
 Antonio Gaudi 1852-1926 151, 152
 葛飾北斎 1760-1849 23, 46, 77, 79, 114,
 128~130, 170, 205, 219, 220, 289
 カフカ, フランツ
 Franz Kafka 1883-1924 121
 カラフェルト, ルイ
 Louis Callaferte 1928-94 28, 40, 42, 46
 カリエ=バルーズ, アルベール=エルネスト

◎著者略歴◎

宗像 衣子 (むなかた・きぬこ)

京都市生まれ

1973年 京都大学文学部フランス文学専攻卒業 同大学院
文学研究科同専攻修士課程修了 同博士課程単位取得退学
新ソルボンヌ・パリ第三大学文学博士

現在 神戸松蔭女子学院大学文学部総合文芸学科教授

著作

*Lyrisme et abstraction : Mallarmé, ouverture vers l'art
contemporain*, Septentrion, France, 1997., 『マラルメの詩学
—抒情と抽象をめぐる近現代の芸術家たち—』(勁草書房
1999), 『ことばとイメージの交歓—フランスと日本の詩
情—』(人文書院 2005) 他

ひび とうざいぶん か
響きあう東西文化

こうほう ほんえい
マラルメの光芒、フェノロサの反影

2015(平成27)年10月10日発行

定価：本体5,400円(税別)

著者 宗像衣子

発行者 田中 大

発行所 株式会社 思文閣出版

〒605-0089 京都市東山区元町355

電話 075-751-1781(代表)

印刷

亜細亜印刷株式会社

製本

© K. Munakata 2015

ISBN978-4-7842-1814-1 C3070